

HOLY WARS

The Rise of Islamic Fundamentalism

新
装
版

イスラム 原理主義

ディリップ・ヒロ——[著]

奥田暁子——[訳]



三一書房

HOLY WARS

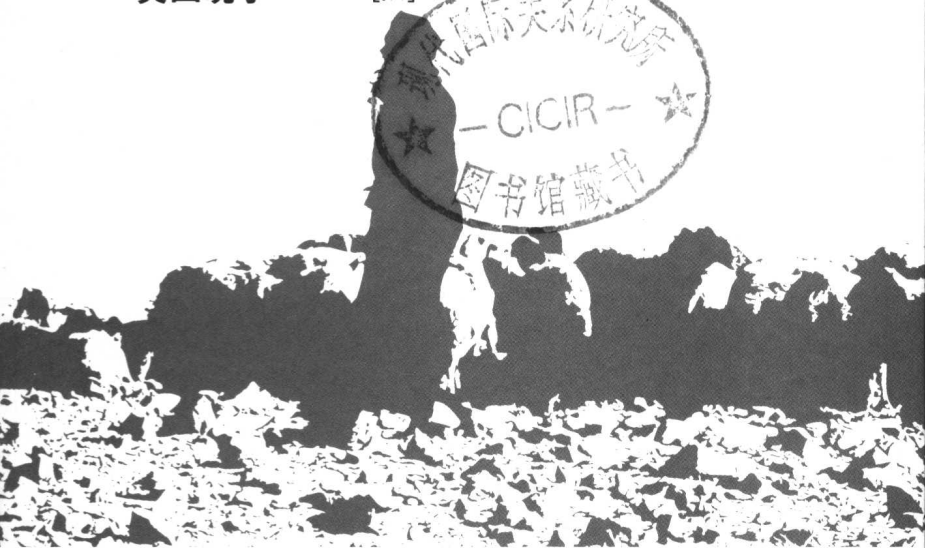
The Rise of Islamic Fundamentalism

新装版

イスラム 原理主義

ディリップ・ヒロ——[著]

奥田暁子——[訳]



三一書房

RB

2002年9月2日

〈著者〉 デイリッパ・ヒロ

パキスタン・ラルカナ出身。インド、英国、米国の大学で学ぶ。米国で修士号取得。1964年以降英国在住。作家・ジャーナリスト。中東に関する論文を「サンデー・タイムズ」「ガーディアン」「ワシントン・ポスト」「ウォール・ストリート・ジャーナル」などに寄稿。

著書に Inside India Today (1976), Inside the Middle East (1982), Iran Under the Ayatollahs (1985) がある。北米中東学会会員。

〈訳者〉 奥田暁子（おくだ・あきこ）

大妻女子大学、恵泉女学園大学、聖心女子大学講師。編著書に『女たちは書いてきた』（径書房）、『宗教のなかの女性史』（青弓社）、『聞き合う女と男』（女と男の時空）第5巻、藤原書店）など。主な訳書に『ユダヤ人の歴史』（三一書房）、『女性解放とキリスト教』（共訳、新教出版社）、『国際分業と女性』（日本経済評論社）、『もうひとりの私』（学芸書林）、『世界の奴隷制の歴史』（明石書店）など。

新装版 イスラム原理主義

2001年10月31日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

2001年11月30日 第1版第2刷発行

訳 者 奥 田 暁 子
©2001年

発 行 者 鈴 木 武 彦

印 刷 所 株 式 会 社 シ ナ ノ

製 本 所 山 本 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都文京区本郷2-11-3

電 話 03 (3812) 3131 番

振 替 東 京 9-84160 番

郵便番号 113-0033

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-380-01217-4

イスラム原理主義

はじめに 11

第一章 イスラムの台頭——スンニー派とシーア派 15

イスラムの揺籃期 15

後継者をめぐる争い 23

フセインの殉教 30

まとめ 38

第二章 正統派イスラムとスーフィズム 41

四つのイスラム法学派 41

スーフィズムの発展 48

インドのイスラム社会 53

ワッハブ派の敗北 58

第三章 近代のイスラム 63

西欧の侵入 63

アフガーニーとその弟子たち 69

第四章 エジプトとシリアのムスリム同胞団 81

ムスリム同胞団の誕生 81

サダトとイスラム組織の対立 92

民衆への浸透 104

バース党との対決 111

イスラム戦線の分裂 124

第五章 サウジアラビア——最初の原理主義国家 135

ワッハーブ派とイフワーン・コロニー 135

原理主義イスラムと近代国家 145

メッカの暴動 158

イスラムによるサウジアラビアの外交政策 168

第六章 イラン——革命的原理主義 175

シーア派思想と一二イマーム派 175

法学者の支配（ヴェラーヤテ・ファキーフ） 194

イスラム国家とイスラム社会の出現 205

社会のイスラム化 228

革命イランのイスラム外交政策 244

ハッジの悲劇 255

第七章 アフガニスタン——変化するイスラム原理主義の運命 267

アフガニスタンの歴史 267

近代化政策とパキスタン問題 278

共産主義革命とその後 292

カブール政権と原理主義者の対決 300

紛争の終結に向けて 308

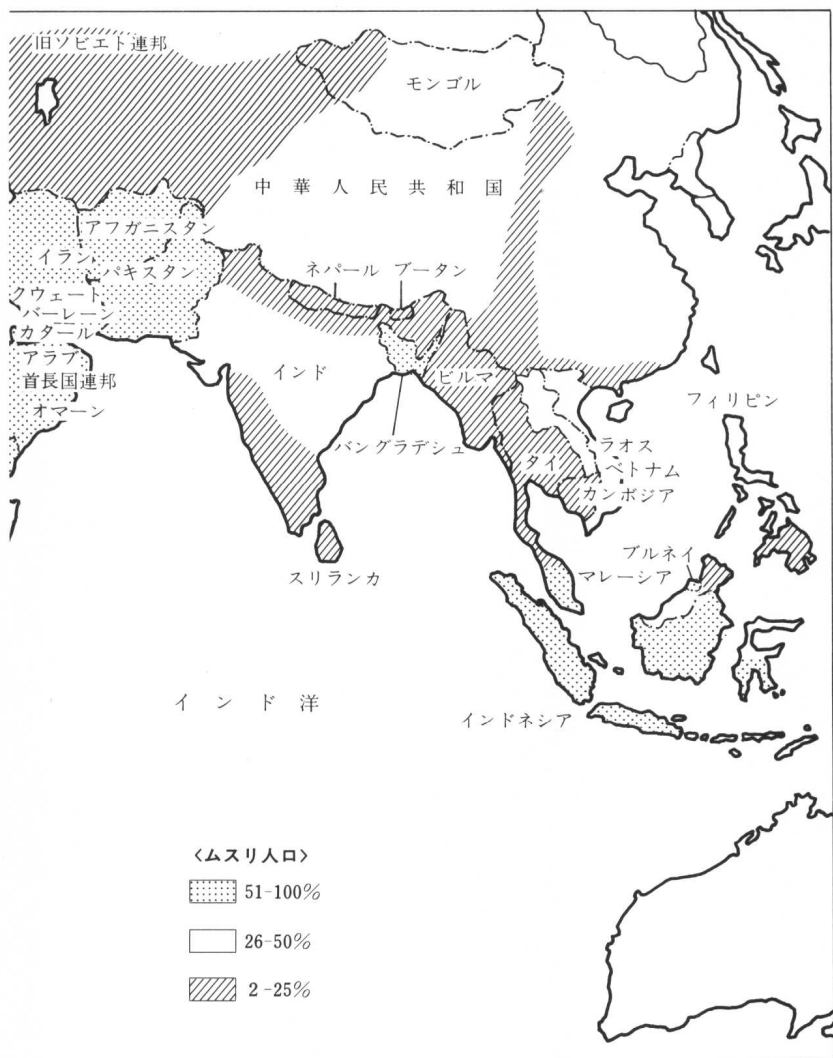
終章 315

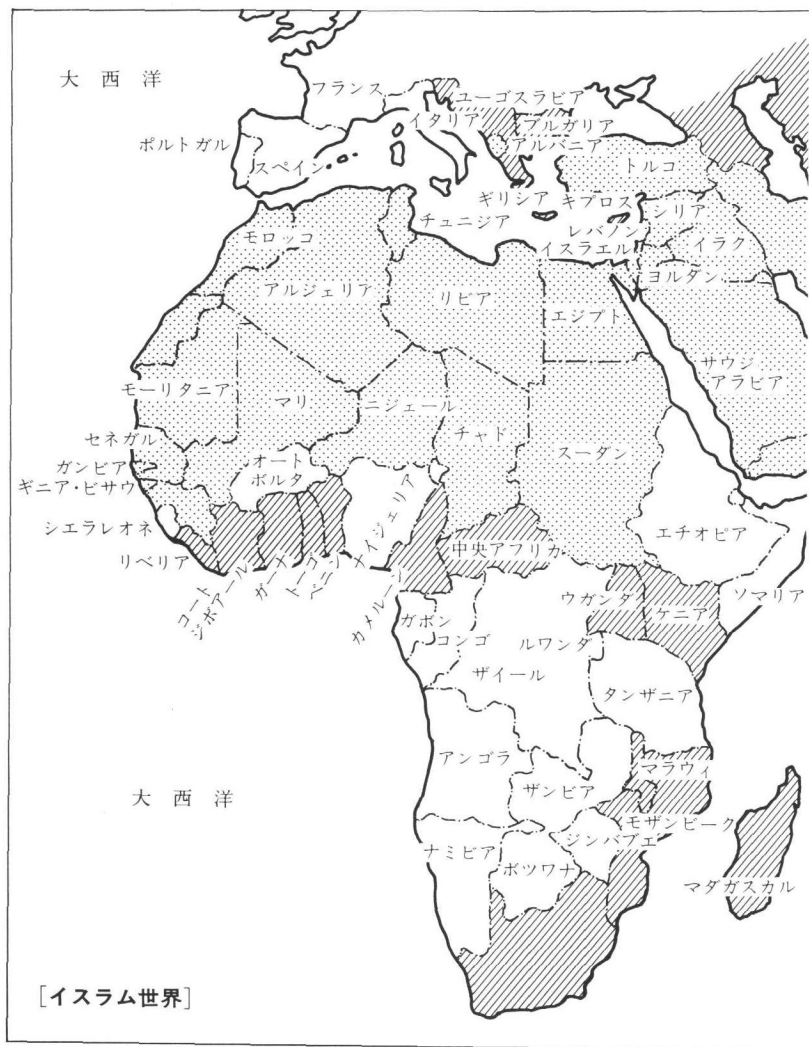
〈追記〉 331

エジプト 331

イラン 333

索引		
訳者あとがき	379	
注	361	アフガニスタン
		347





アラビア語・ペルシア用語語集

アシュラー ムハッラム月一〇日

アーヤトゥラー アッラーの徴の意。上級宗教指導者の

称号

アラウイ イマーム・アリーの弟子または子孫

アリーム イスラム法学者。複数形はウラマー

イジュティハード 創造的解釈。コーラン、ハデイー

スへのキヤースの適用を意味する。

イジュマー 合意

イツティラート 情報

イード 祭

イード・アルフィットル 断食明けの祭

イフワーン 兄弟または同胞

イブン（またはブン） 息子

イマーム モスクで礼拝を指導する人

イラーヒー 神

ヴェラーヤテ 支配

ウスール 根。イスラム法では法源。

ウラマー イスラム法学者

ウンマ 共同体

カーヌーン 世俗法

キサーズ 報復

キヤース 類推

サイイド イマーム・フセインの男系子孫に使われる

称号

サウム ラマゲン中の断食

ザカート 喜捨

サラフ 祖先

サラフイーヤ 初期イスラムの原則や精神の回復をめ

ざす思想

シーア 党派

ジハード 聖戦、アッラーの名において戦うこと

シャール 国王

シャイフ 長老。さまざまな集団の長にも使う。

シャハーダ イスラムの中心的な教え

ジャーヒリーヤ 無知の時代、イスラム以前の時代

ジャマーアト 社会

シャリーア イスラムの聖法

シャリーフ 高貴な血筋の人

シュウラ 協議

スーフ 羊毛

スーフイー イスラム神秘思想のにない手。スーフでできた粗衣を着用したことに由来する

スルタン 統治者

スンナ 正しい伝統。預言者ムハンマドの慣行のこと。

スンニー スンナを守る人

ダアワ イスラムの宣教

タクリード 先人の意見にそのまましたがうこと

タリーカ (またはタリーク) 道

ダール 家または領域

タルフィーク 適用の工夫

タンジマート 西欧化改革運動とその成果

ディーン 宗教

ニザーム 国王の命令

バシージ 動員

バスト 聖域

ハズラート 預言者またはイマームに使われる称号

ハッジ メッカへの巡礼

ハッド シャリーアが定めている刑罰

ハディース 預言者ムハンマドの言行録

ハラージ アウトサイダー

パルチャム 旗

ヒジャブ ヴェール

ヒジュラ 移住

ファキーフ イスラム法学者

ファトワー 宗教的裁定

フィトナ 扇動行為

フィトル 断食明け

フェダーイン 自己犠牲

フムス 収益の五分の一

ホジャタリスラム 下級宗教指導者の称号

マズハブ 法学派

マスラハ 最大の利益を保證する法や解釈を選択すること

こと

マドラサ 宗教学校

マフディ アッラーに導かれた人。メシアの意味でも使われる。

使われる。

マワリー 本来の意味は親族。征服された非アラブ・ムスリムを意味することもある。

ムジュタヒド イジュティハードを行う人

ムスタザファン 貧しい人、抑圧された人

ムスリム イスラムを受け入れた人

ムタツウィン 宗教警察

ムツラー 聖職者

ムトラク 絶対的

ムフタシフ 宗教・道徳行為を監視する人

ムフティ イスラム法の解釈・適用に関し意見を述べる資格を認められた法学の権威者。

ムルシド 導師

ムンタザール

ワクフ 寄進財産

ワタン 郷土または国家

はじめに

近年、イスラム原理主義は第三世界の運動よりも大きな影響を西側諸国に与えている。その理由は、原理主義運動を経験している多くの国が戦略的に重要な中東にあるのと、これらの国のいくつかは西側経済が大きく依存している石油の産出国であるためである。

西側の人びとはイスラム原理主義と一九七九年のイラン革命を結びつけ、原理主義を西側の利益を侵害することに熱中するファナティックな運動とみる傾向がある。しかし、現代のイスラム原理主義国家としては最も古いサウジアラビアは西側の同盟国であるし、アフガニスタンでは欧米の武器や資金がカブールの共産主義政権と戦っているアフガン原理主義者を元気づける重要な役割を果たしている。

イスラムの歴史にみられる顕著な特徴の一つは、イスラムの歴史が復興運動の多くの事例を提供していることである。どの既成宗教もときどき刷新を行うものだが、イスラムは特別である。イスラムは宗教以上のものであるからだ。イスラムはそれを受け入れた人びと（ムスリム）をすべて包含する完全な社会システムである。あらゆる時代、あらゆる場所に適応する文明なのだ。

この包括的なシステムは生活の全ての面で信徒が守るべき基準や規範を設定する。生身の人間であれば、このように厳しく、生活のあらゆる面に及ぶ基準にしたがって行動することはできない。そこで時々とくに信仰心の篤い指導者が出現し、墮落を止めるよう呼びかけるのである。

原理主義とは宗教システムの基本原理を定義し、それに従おうとする努力のために使われる言葉であ

る。イスラム原理主義の重要な教義の一つは、危険な行為の混じる不純物からイスラムの教えの純粹性を守ることである。原理主義に関係があるのはイスラムの再生、あるいは復興である。その思想を支えているのは、あらゆる活力を解放するためにイスラムを純化しようとする精神力である。

中世では、この浄化を求める動きはイスラムから迷信やスコラのな律法主義を排除することであった。つまり、原理主義者の対応は純粹に内面的であった。今日の反応は内面と外形の両方である。イスラムをスコラ学的なクモの糸から解放し、同時に西側から入ってきた思想を捨てることである。

イスラムには宗教と政治の区別はない。ムハンマドは神の言葉を伝える使徒であつただけでなく、行政者であり、裁判官であり、軍事司令官でもあつた。イスラム法はコーランとハディース（預言者ムハンマドの言行録）からなっている。このため、ムハンマドの人生の概略を説明する必要がある。それについては本書の第一章で取り上げる。

預言者ムハンマドが六三二年に死んだ後に、イスラムはアラビア半島の東から西まで急速に広がり、長い年月にわたつて独自の伝統や宗教を信奉していた人びとによって受け入れられた。イスラムが改宗者がそれまで信じていたイスラム以前の信仰や慣習を吸収することが出来たのはスーフイズム（イスラム神秘主義）が台頭したからである。こうして、イスラムは自らをさまざまな文化に適応させ、アラブの軍事征服者の第一世代以後は、しばしば、スーフイーの指導者が最も影響力のある宣教師となつた。しかし、その過程で、イスラムは薄められた。その結果がスーフイズムに正統思想を入れたり、ムスリムの慣行を浄化することを重視する復興運動の登場となつたのである。以上が第二章の要旨である。

次の章ではイスラムが常に防衛に回つた、キリスト教国と接触するようになった近代のイスラムを取り上げる。その例としては、ヨーロッパ諸国と接したオスマントルコや、イギリスの東インド会社と取

引をしたデリーのムガル帝国がある。西欧諸国の支配にイスラム世界はさまざまなかたちで反応した。パン・イスラム主義者のジャマル・アッディーン・アフガーニー（一八三八—一九七年）は武力による防衛の必要、西欧の力の秘密を学ぶ試み、イスラムに西欧の思考様式を取り入れること、などを考えた。アフガーニーの最もよく知られた弟子のムハンマド・アブドゥフ（一八四九—一九〇五年）はエジプトのイスラム改革者として有名であり、その後を継いだのが彼の有能な弟子のラシード・リダー（一八六五—一九三五年）である。

以上のような状況を背景に、本書ではエジプト、シリア、リビア、サウジアラビア、イラン、アフガニスタンについて事例研究を行う。それぞれの事例はみな違う。ムスリム同胞団の発祥の地エジプトでは、イスラム原理主義は一九三〇年代から政治的であった。エジプトのイスラム原理主義は時代によって異なるが、政権側から懇願されたり、取り込まれたり、弾圧されたりしてきた。一九七〇年にムハンマド・アンワール・サダトが大統領になると、原理主義運動の穏健派は政治・宗教体制に取り込まれ、急進派は武力抵抗と暗殺の手段に頼るようになった。サダトも暗殺の標的になった一人である。この複雑な状況はシリアの運動の運命とは異なっている。シリアの原理主義は、ハフーズ・アサド大統領とその前任者の社会主義政党、バース党に敵対してきた。このため、シリアではイスラム原理主義は純粋な抵抗運動として成長した（リビアの原理主義が力を持っているかどうかは異論のあるところである。カダフィ大佐のシャリーアヘイスラム法）の解釈は慣例にとらわれず非常に自由であるので、原理主義思想家の多くは彼を正道から外れているとみている）。

サウジアラビアとイランの原理主義政権もきわめて対照的である。サウジアラビアは憲法も議会も持たない君主国家である。イランは憲法と普通選挙で選ばれた活動的な議会を持つ共和国である。両国の

歴史もまったく違う。六二〇年代にアラビア半島で起こった預言者ムハンマドの出来事を現代に再規定するに当たって、熱心なイスラム主義者として活躍したアブドゥル・アジーズ・イブン・サウードは相対立するアラブの部族、遊牧民と定住民、を統合して一九三二年、サウジアラビア国家をつくった。他方のイランは、一六世紀初頭からサファヴィー朝の中心地であった。アーヤトollah・ルーホッラー・ホメイニの率いる革命運動がイスラム政権を到来させるまでは、イランにはパーレヴィ朝（一九二六—七九年）の統治する数十年の世俗政権の時代があった。その意味で、イランの事例はイスラム諸国会議機構に加盟している四五カ国のほとんどと同じである。これらの国々もヨーロッパ諸国の植民地であったことを別にすれば、イランと同じように近代化と世俗化を経験してきた。

アフガニスタンは独自のケースである。政治的にも経済的にもヨーロッパの支配を免れた独立国家として、アフガニスタンの宗教体制は、一九二九年に遅ればせながら近代化と世俗化を推進しようとしたアマヌッラー王を廃位させる上で大きな役割を果たした。共産主義政権が統治する今日のアフガニスタンでは、イスラムは武力抵抗のイデオロギーとなっている。しかし、左派政権は正統派の聖職者やスーフィーの指導者との全面対決を避けている。一九七八年四月に起こったサウル（四月）革命直後に大々的な世俗化に踏み出した当局は、聖職者を大切にし、モスクを建て、暴徒を反イスラムと呼ぶなど、その路線を後退させている。

要約すれば、イスラム原理主義の基本原則については大方の意見は一致しているが、運動を行う方法は国によって違うということである。イスラム原理主義をサウジとイランの政権が信奉しているというだけでは、なぜ彼らが国外では統一行動をとり、国内では独自の政策を守っているのかわからない。以上の方針に沿って、著者は思想であり、運動であるイスラム原理主義を解説したいと思っている。